早稲田大学環境総合研究センター（WERI）
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

第 9 回ふくしま学（楽）会

ふくしまから伝えたいこと、

知らなければいけないこと。

報告書

日　時：　2022 年 1 月 30 日 10:00－17:30
会　場：　Zoom ミーティング
主　催：　早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
　　早稲田大学レジリエンス研究所（WRRI）
共　催：　福島県広野町
後　援：　公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構
　　双葉地方町村会
　　早稲田大学アジア太平洋研究センター（WIAPS）
　　早稲田大学環境総合研究センター（WERI）

2022 年 3 月 3 日

【参加者数:120 人】

＜プログラム＞
総合司会:永井祐二(早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授)

【開会挨拶】 10:00-10:10
　友成真一(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科長、早稲田大学環境総合研究センター所長)

【第1部　1F 廃炉の先とこれからの対話のあり方を考える】 10:10-12:00

報告 1　佐川生華・大和田蒼空(福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年)
「広島視察を通じて学んだこと」吉田　学(HAMADOORI 13 代表、株式会社タイズスタイル・代表取締役)

報告 2　森口祐一(国立環境研究所理事、1F 廃炉の先研究会・副代表)
「1F 廃炉の先研究会の活動について」

パネル・ディスカッション(報告者含む)
　司会:崎田裕子(NPO　法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長)

　パネリスト:
　　井上　正(電力中央研究所名誉研究アドバイザー)
　　宮野　廣(日本原子力学会福島第一原子力発電所　廃炉検討委員会・委員長)
　　吉田恵美子(NPO 法人・ザ・ピープル理事長)
　　福田光紀(経済産業省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長)
　　木原昌二(原子力規制委員会・原子力規制庁・東京電力福島第一原子力発電所事故対策室・室長補佐)
　　岡崎　誠(東京電力・福島第一廃炉推進カンパニー・廃炉コミュニケーションセンター・副所長)

お昼休み 12:00-13:00

【第 2 部　福島の経験を学び、語り継ぐ枠組みを考える】 13:00-14:50

報告 1　高原耕平(人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会)
「エコミュージアム調査概要報告」

報告 2　小川聡久(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科博士 1 年)、松川希映(早稲田大学院アジア太平洋研究科修士 1 年)
「浜通り視察を経て感じたそれぞれの教訓」

報告 3　渡邉光季(福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年)
「中高校生と大学生との対話の報告」

報告 4　曽我実由(早稲田大学商学部 2 年生)、小松亮太(早稲田大学スポーツ科学部 2 年生)、倉重水優(早稲田大学政治経済学部 2 年生)、髙垣慶太(早稲田大学社会科学部 1 年生)、佐々木健人(早稲田大学国際教養学部 1 年生)
　「現地での体感と実践枠組みの提案」

パネル・ディスカッション（報告者含む）
　司会：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士）

　パネリスト：
　　佐藤亜紀（HAMADOORI 13・事務局）
　　筑波匡介（福島県立博物館・学芸員）

休憩　14:50-15:00

【グループ討論：福島の学びを若い世代と考える】 15:00-16:20

【第 4 部　総括ディスカッション：対話を通じた自分事化のリレー】 16:20-17:20

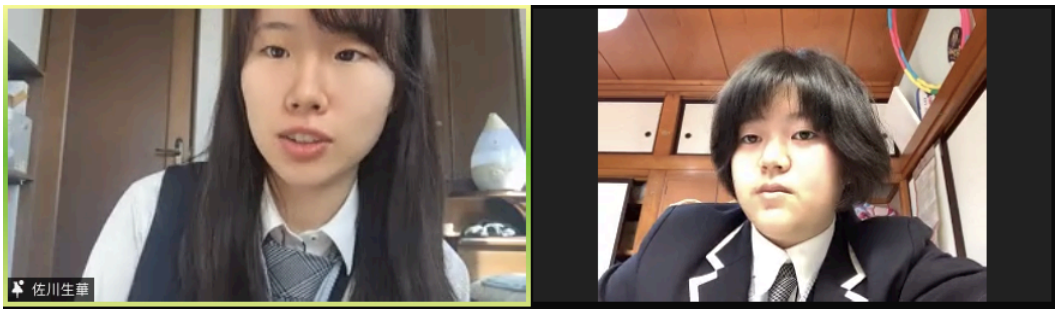
司会：永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授）

パネリスト：
　菅波香織（未来会議事務局長、弁護士）
　松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
　松川希映（大学院アジア太平洋研究科修士 1 年）
　渡邉光季（福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年）
　筑波匡介（福島県立博物館・学芸員）
　高原耕平（人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会）
　森口祐一(国立環境研究所理事、1F 廃炉の先研究会・副代表）
　福田光紀（経済産業省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長）
　崎田裕子（NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長）

【閉会挨拶】 17:20-17:30
　松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）

第 1 部　1F 廃炉の先とこれからの対話のあり方を考える
（報告内容については、報告資料をご参照ください）

【報告】
報告 1 「広島視察を通じて学んだこと」
佐川生華・大和田蒼空(福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年)



報告 2 「1F 廃炉の先研究会の活動について」
森口祐一(国立環境研究所理事、1F 廃炉の先研究会・副代表)

パネル・ディスカッション

司会：崎田裕子（NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長）

パネリスト：井上　正（電力中央研究所名誉研究アドバイザー）
宮野　廣（日本原子力学会福島第一原子力発電所　廃炉検討委員会・委員長）
吉田恵美子（NPO 法人・ザ・ピープル理事長）
福田光紀（経済産業省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長）
木原昌二（原子力規制委員会・原子力規制庁・東京電力福島第一原子力発電所事故対策室・室長補佐）
岡崎　誠（東京電力・福島第一廃炉推進カンパニー・廃炉コミュニケーションセンター・副所長）

井上：「地域社会の中の廃炉」という考え方が重要である。地域の人、これからを担う人（ふたば未来学園、浜通り地域の人、1F 廃炉の先研究会）が一緒に廃炉を考える勉強会を開き、廃炉関係の課題を議論したら良い。課題としては、1F 事故の影響、廃炉の進捗、町の将来像、1F 廃炉の課題、対話のあり方などがあげられる。地域が主体的に廃炉を考えることが重要である。これらの課題を一緒に考えることで、今後への教訓をまとめると良い。

1F 廃炉のガバナンスについて、地域社会にまず関心を持ってもらう必要がある。50 年以上かかると予想される 1F 廃炉事業は地域社会に大きな影響を与えるため、地域社会の人々の思いを共有することが重要である。そのためには、パネルを設定し、1F 廃炉事業への地域参加が求められる。地域社会の未来像を住民が主体的に描き、まとめ、政府に提案することが理想的である。

宮野：地域活性化のために、福島復興のタネが必要になる。芽を出す仕組み、育てる仕組みが求められる。そして、地域住民の 1F 廃炉への理解を促進するため、住民が一方的に説明を受けるのではなく、住民も参加して一緒に 1F 廃炉を考えることが重要である。今後、対話と情報の共有化を進めるには、明確な目標を設定し、熱い提案が必要になる。私は、国・東電・地域と共に廃炉を進める第 3 セクターとして、「1F 廃炉事業機構」を新設することを提案したい。同時に、福島の知見を活用するため、世界から人材を集める「国際原子力研究機構」を設立し、カーボン・ニュートラルに役立つ廃炉と新設炉の研究を国際共同で進めていくことも提案する。

吉田： 1F 廃炉の先研究会に参加してきたことで、1F 廃炉の難しさ、そして 1F 廃炉は科学的課題だけでなく、私たちも関わらなくてはいけない社会的課題であることを認識するようになった。地域社会の人はメディアを通じて情報を受け取るが、メディアからの情報は実際の廃炉に関する状況と違うと感じる。どう情報発信をすればいいのかを日々考えたが、やはり専門家と地域社会とのしっかりとした対話が重要であると考える。今何を次の世代に引き継いでいくかを考えなければならない時期が迫ってきている。責任のある今の世代が棚上げにしてきた問題をどうするべきかを考える際に、責任、専門知識、肩書きに関わらず、エリアで物事を区切らない、話しあう場が必要である。

福田：1F 廃炉・処理水について福島評議会や 1F 視察・座談会、福島県内外での説明会といったコミュニケーション活動に携わっている。その中でまず重視されるのは大前提としての科学の視点である。例えば、処理水の問題に関して、処理水とは何かといったところからお話している。これまで多くの方々と意見交換をさせていただいているが、科学的な安全確保に加えて、風評などのご心配の声もいただく。しっかり対策を講じることが前提となる。廃炉という前例のない長期の取り組みの現状の課題について知っていただき、一緒に議論させていただき、一つ一つ着実に前に進めていくことが大事と考えている。

木原：地域社会とどのように 1F 廃炉や事故調査に関する情報を共有するかが課題である。これまで原子力規制庁の情報発信の活動は研究者向けの事故調査・分析の検討会が主となっており、地域社会の人が何を知りたいかは把握できていない。一方で、地域住民に情報を伝えるためには、わかりやすい説明だけでは足りず、地域が何を知りたいかを把握することも重要だと思う。原子力規制庁は科学的視点がベースであるが、1F 廃炉の先研究会や原子力分野以外の学会にも出て情報発信を試みているところ。地域社会の知りたいことなどについても考えていきたい。

岡崎：東京電力の廃炉に関するコミュニケーションの取り組みを紹介したい。当社は視察や現場取材に最も力を入れているが、日々の報道対応、Web サイト、廃炉資料館などを通して情報発信を行っている。また、地域イベントにも参加している。特に 1F 現場視察については、福島県民を対象に 2019 年から座談会付きで延べ 8 回実施してきた。1F 視察を実施した後に、対話のセッションを加え、生のお声を聞かせていただいている。コロナ禍の今はバーチャル・ツアーもメニュー化し、柔軟に対応するようにしている。いろいろな意見やフィードバックを聞きながら、情報が地域社会に伝わるように改善を模索し続けていく。

森口：やはり対話の難しさを感じる。例えば、本日のパネルも含めて、多くの対話は時間の制限が課されているため、発話者はそれぞれ自分の伝えたいことに集中してしまう。そこで、どのように発話者以外の人々から知りたいことを集めるかを考える必要がある。対話は役所主導や審議会などいろいろなやり方はあるが、1F 廃炉問題はどこが中心なのかを特定することが難しい。市民から意見を聞くのはいいが、誰から聞くのか。また、そもそも社会の関心が薄い中で 1F 廃炉のような難題を取り扱おうとしたらさらに挑戦的になる。本日のふくしま学（楽）会は良い試みかもしれない。

大和田（高校生）：自分の住む広野町ではさまざまな原子力に関する対話の取り組みが行われていることを知らなかった。この原因は、住民が町を通じてくる情報を見逃してしまっていることにあるかもしれない。商店街にポスターの掲載や子供や若い人が参加するイベントのような、発信の仕方が良いかもしれない。また、広島研修に行った際、広島の明確な平和の教訓に対し、福島の原発事故の教訓とは何かを考えれば考えるほど分からないと感じた。それについて、専門家の意見を伺いたい。

佐川（高校生）：ふたば未来学園に入る前に、双葉郡のことを全く知らなかった。現在は地域の本当のことを伝えたいと思って、魅力発信を頑張っている。可能な限り、様々な地域を実際に訪れ、考えて、発信していきたい。

井上：行政・事業者側は話したいが、住民側からの声が伝わってこない。どのようにそのギャップを埋めるか。現在は廃炉・汚染水・処理水対策福島評議会に地域の首長だけが出席しているが、若者も含めた一般人も参加できる場を作ったら良い。最初メンバーを集めるのは難しいかもしれないが、メンバーをある程度固定してから次第に交替してもいい。

宮野：対話では、わかりやすく伝えるより、聞くことが重要である。また、対話の場は大事であるが、対話の場での成果をまとめて行政に提案し、考えてもらうというような伝達も必要なのではないかと思う。

吉田：岡崎さんの紹介にあった東電による 1F 視察後の座談会では、どのような対話が行われたのかが気になった。座談会でどういう内容を話したか、住民の提言をどう生かしたかなど、そのような情報をより積極的に開示すれば、活動が広がるし、住民にとって透明性も向上するだろう。

岡崎：座談会では厳しい意見もあれば、実際に視察したことで安心したという感想もあった。この活動

をより広げたら良いと感じる。

木原：原子力規制を担当しているため、今までは原子力分野との関係がメインであり、地域の思いをあまり考えていなかった。今後地域の思いにもより注意を払いたい。

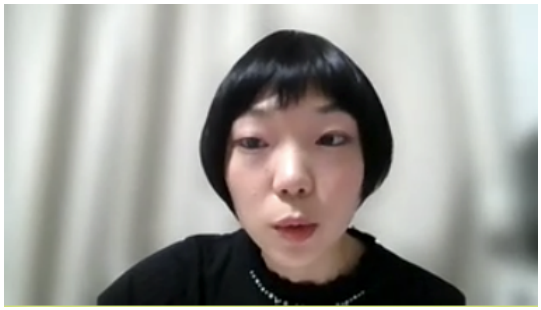
福田：住民の方々の意見について、これまでどのように反映しているかをより発信していく必要があると思う。本日の場に限らず、引き続き多くの方とのコミュニケーションを続けていきたい。

松岡：リサーチセンターは一昨年以来、多様な関係者を交えて共に考える対話の場を設定し、1F 廃炉の将来像につい議論してきた。アメリカ・スリーマイル島原発事故処理の市民パネルの経験によれば、対話と同時に、その対話を支える学びの場を作らないと、建設的な議論にならないことが分かる。ふたば未来学園の生徒や地域住民、研究者も含め、一緒に学ぶ場を作ることが求められる。事故炉の事故処理としての 1F 廃炉とは何か、更地を求めると言うことで良いのか、何のための更地なのか、こうした問題をしっかりと議論し、1F 廃炉の将来像に関する多様な選択肢を発見することが、1F 廃炉の先研究会の目的であった。議論においては信頼構築が重要であり、今日はようやく様々な方が集まって話しあうことができた。今後ともより信頼関係を作りながら自由な対話を続けていきたい。

第 2 部　福島の経験を学び、語り継ぐ枠組みを考える
（報告内容については、報告資料をご参照ください）

【報告】
報告 1「エコミュージアム調査概要報告」
高原耕平（人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会）

報告 2「浜通り視察を経て感じたそれぞれの教訓」
小川聡久（早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科博士 1 年）、松川希映（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士 1 年）



報告 3 「中高校生と大学生との対話の報告」
渡邉光季（福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年）

報告 4 「現地での体感と実践枠組みの提案」
曽我実由（早稲田大学商学部 2 年）、小松亮太（スポーツ科学部 2 年）、倉重水優（政治経済学部 2 年）、髙垣慶太（社会科学部 1 年）、佐々木健人（国際教養学部 1 年）

パネル・ディスカッション

司会：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士）

パネリスト：佐藤亜紀（HAMADOORI 13・事務局）
筑波匡介（福島県立博物館・学芸員）

佐藤：大熊町の現状をより多くの人に知ってほしいと思い、いろいろな活動を展開してきた。その一つとして、2022 年 1 月 9 日におおくまコミュニティ作り実行委員会が主催した里帰り餅つき大会があげられる。実行委員会は 2018 年に設立され、地元行政、東京電力をはじめとした地元企業と連携して、地域イベントを行っている。イベントを通して、地域の伝統行事の継承や若者の参加を促し、さらに、多様な人と地域の人と出会う場の設定を工夫している。そのような場合で繋がったご縁をこれからも発展していけたら良い。

筑波：私は、以前、公益社団法人・中越防災安全推進機構に所属し、中越地震の被災伝承施設の整備に関わっていた。中越地震の被災地は少子高齢化が進んでいる中山間地域である。メモリアル施設は現世利益に重点を置き、地域振興を中越地震の復興のビジョンとして、自治体が連携しながら、アーカイブ施設の整備に取り組んだ。

今、福島博物館は震災遺産やデジタル技術を活用して展示や防災教育を行っている。主体性を持って災害や地域のことを学ばない限り、自分事にならないと考える。2019 年の世界博物館会議に福島博物館も出展した。展示物に付加した情報も併せ、多くの人に見てもらい、多くの人と意見交換するような資料活用も大切である。世界に発信するには、福島県が一丸となって取り組む必要があると考えた。それ以降、浜通り地域の博物館・資料館同士の連携を目指し、大熊アーカイブ施設整備検討委員会を発足している。博物館が地域と連携し、地域の知識と経験を共有しながら、地域の暮らしを主体的に考え未来に活かす場となることを目指したい。本日の場では、ぜひ若い人の意見・アイディアを伺いたい。

高原：松川さんが話した、訪れた人の記憶の 1 ページにならないような経験という点が興味深い。普通私たちは物事を自分の中で 1 ページに折り込み、それで人生の物語を作るわけである。ドマティックでないが、単純な記憶の 1 ページにならないような経験とはどういうものがありうるか。

松川（大学院生）：記憶の 1 ページにならないとは、思い出にとどまらないという意味である。見て聞いて終わるのではなく、福島での経験を自分の将来によりつなげていく。そして、より多くの人が福島に興味を持つようになり、広がっていくことも大事である。

渡邊（高校生）：私は他の人たちと違うことがしたい、他の高校生が知らないことを知りたいことから、ふたば未来学園の探求プログラムに興味を持つようになり、この学校に入学することにした。探求プログラムを通じて地域課題に関心を持つようになった。松川さんの記憶の 1 ページだけにしないとの意見に賛成する。福島の事故はいつか教科書の 1 ページだけになってしまうかを危惧する。その 1 ページに収まらない人々の感覚や思いをどう残すか。これから考え続けたい。

佐藤：表面的なものの捉え方をしないために、実際の体験が必要であると実感した。大熊町にもう 8 年住んだ自分でも、やはり分かった気にならない。少しずつ近づきたいから、これからも大熊町にいたい。今回は伝承がテーマであるが、今の自分は、興味関心のある皆さんに伝えられるものの蓄積ができているため、大熊町の人々に会いに来ていただいたら嬉しく思う。

曽我（大学生）：2021 年 11 月の福島復興ワークショップで佐藤さんには大熊町を案内していただいた。その時の経験が福島復興を自分事とする契機になった。今まで地域に足を踏み入れる学生は意識の高い、何か学術のために入るのが一般的であり、距離感がある。しかし、佐藤さんは私たちにいつでも遊びに来てねと言ってくれた。その気軽に行ける感じが自分事化につながると思う。

小松（大学生）：佐藤さんの実際の体験が必要であるとの意見に同感する。学生のアンケートの結果、福島に行く前は答えに単純な名詞が多かったが、佐藤さんをはじめとした福島の方々に案内していただいたら、アンケートの結果で動詞や形容詞が多くなった。その変化は自分事化につながると思う。

筑波：子供たちは東日本大震災に対する記憶が曖昧である。防災教育を行う際に、命を守ると言っても、子供たちは想像できない。しかし、例えば、災害時に困った人をどう助けるかを考えさせることで自分事化できるかもしれない。自分のできることを考えることから、モチベーションを持たせる。防災教育

を受けた子供たちが自分事として考えられるようにして、災害復興や災害対応が文化として育つように導いていかないといけない。

高原：第 2 部の議論は第 1 部と違うのは時間の感覚であると考える。第 1 部は長期計画に着目し、2050 年を目安として議論していた。第 2 部では今を大事にしていて、つまり現世利益を重視するように感じる。今を生かすという福島へ遊びに行くことや、防災教育や自分事化など、そこに何かヒントがある気がする。

倉重（大学生）：私はずっと東京に住んでいるし、震災に対しても記憶があまりない。何も知らない若者として地域に入って最初は不安であったが、本日の議論を聞き、若者世代の視点があるからこそ、地域の復興の新しい可能性を広げると思った。同じものを見ても、人の経験によって見方も違うが、その違いを尊重し、世代や地域を超えた対話ができたら良い。

菅波：これまでのふくしま学（楽）会は真面目な会のイメージであり、「楽」の要素が薄く、参加のハードルが高いように感じる。今後、名称にある「楽」の部分を強めてもらいたい。

第 3 部　グループ討論：福島の学びを若い世代と考える

グループ1

・自分事化が大きなテーマであった。他人事と自分事の間に「知り合い事」を挟んでいる。例えば、ふたば未来学園の生徒と友達になり、「ふたば未来学園の子がいる福島」という意味で「他人事」から「知り合い事」になった。そのため、イベントに参加したりや足を運んだりして、多くの地域の人と知り合うことが、自分事化には大事である。

グループ 2

・2021 年 11 月の福島浜通り地域復興研究ワークショップに参加した学生が、参加前後に認識が変化した。自分の先入観が壊され、生の声を聴くことの大切さを実感した。
・ワークショップの事前学習で福島について調べていたが、被災者の体験談を聞く中で事前に調べていたことが良い意味で壊された。生の声を聞くことの大切さを実感した。震災に対し新たなイメージを得ることができた。

・福島住民は学生に素の状態で福島に来て、感じて、知ってほしいと述べた。学生も復興や震災への見方の変化が今後の研究の参考としようとし、現地の状況を県外に発信することの重要さを認識した。

グループ 3

・地域への貢献という期待に、高校生はプレッシャーに感じているのではという心配の声があったが、高校生は、「プレッシャーはあるが、誰が伝えていくのか」という想いをコメントした。
・若い人だけに託してしてはいけないという意見があった。そのため、世代や専門性を越えて話し合える場が必要であるとの提案があった。
・さまざまな角度から物事を見るのが重要である。福島の教訓を一つに決めてしまうと一つの角度からしか見ることができない可能性がある。そのため、明確に一つに決めてはいけないとの意見があった。

グループ 4

・地域文化の共有により自分事化される。文化の復活・保存、コミュニティでの共有をすることで、自分事化の輪が広がっていくと感じた。
・地域では、食の魅力を知ることを通して自分事化を促進するツアーという活動がある。今後のふくしま学（楽）会で、オンラインツアーなどの形式も加え、よりアクティブで楽しい学会にしてほしい。
・義務感と自分事化を区別するべきである。「この地に生まれたから継承しなければならない」という義務感と「自分がやりたいからする」という自分事化は異なるものである。

グループ 5

・復興に携わっていく上で地域の人との信頼関係をいかに築くか。その中で、組織ではなく、個々人が一対一の良い関係が重要である。
・遊びや雑談の中で信頼関係が生まれてくる。
・県外の人が現地に足を運ぶことは重要であるが、住民側からも復興に踏み込んで、双方が歩み寄ることで信頼関係を醸成することが良い。

グループ 6

・歴史を知らなければ、未来のことを語ることができないことから、歴史を知ることが重要である。
・若者にとって最初に歴史を知るきっかけとなる教育に問題がある。福島にいるからといって、教科書をベースに教育を行っているため、特別な原子力教育が福島でできていない。社会人とつながる場や対話の場が欠けていることも問題であり、実践を増やすことが重要になる。例えば、原発に関わった人のエピソードやこの地域で子育てを決意した母の想いなどを聞き、地域の人々の暮らしの大切さを感じる。

第 4 部　総括ディスカッション：対話を通じた自分事化のリレー

司会：永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授）

パネリスト：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士）
松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
松川希映（大学院アジア太平洋研究科修士 1 年）
渡邉光季（福島県立ふたば未来学園高等学校 2 年）

筑波匡介（福島県立博物館・学芸員）
高原耕平（人と防災未来センター・主任研究員、創造的復興研究会）
森口祐一(国立環境研究所理事、1F 廃炉の先研究会・副代表）
福田光紀（経済産業省資源エネルギー庁・原子力発電所事故収束対応室・室長）
崎田裕子（NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長）

菅波：8 年前に水俣に行ったとき、地元の漁師さんは、自分たちがより頑張っていれば福島でこんなことがなかったと謝ってくれた。その経験は私にとってインパクトが大きかった。心に刺さる経験がよく当事者意識に気付くきっかけとなる。言語だけでなく、当事者意識に気付く体験を作る新体制が必要になる。

2011 年生まれの娘が学校の防災教育カリキュラムで津波や原発事故を学んでいる。彼女にとって、震災から 10 年経った今、自分の近くで東日本大震災が起こったことを初めて実感したという。これからの世代は、過去の震災のことをリアルに感じるには人によって時間差があるだろう。先日の福島復興ワークショップに参加した大学生の皆さんは、地域に来て、いろいろな人と触れあって、最初の一歩を踏み出した。もちろん難しい課題はたくさんあるが、そこに希望もある。

渡邊（高校生）：今日はいろいろな世代の方と話ができて、お互いに自分の意見を出し、考える時間を作るのが大切であると改めて感じた。なお、自分事として考えるには、その人はその時どう思ったか、当時の状況はどうだったかなどを想像する能力が大事である。

松川（大学院生）：他人事と自分事の間にある「知り合い事」が大切であるという意見に賛成する。自分で体験しなければ、自分の限られた知識の中で浅く認識するしかできない。現地の人と知り合うことによって、「知らない地域」から「〇〇さんがいる地域」に変わる。それは自分事化につながる。また、地域との関わりを自分の将来にどう活かすかも考えることが必要である。

松岡：自分事（じぶんごと）をめぐって良い議論をしていただいている。私どもの早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが考えていることは「社会事（しゃかいごと）化」である。Sympathy だけでなく、Empathy としての共感を社会に広げていくことを意味する。どのように社会事化するか、その中で自分事がどう作用すればいいか、社会事化を支える仕組みをどう作るかなどの課題が存在している。本日の議論で一番印象深いのは、第 1 部の高校生による福島原子力災害の教訓は何か分からないとの発言であった。先日とある研究者からも、被災地域は原子力災害の話をするより、別の新しい価値を作る議論をすべきなのではという話を聞いた。被災者はあまり原子力災害のことを考えたくないとよく言われるが、福島に関わってきた研究者までもそういう発言をして、すごく考えさせられた。広島は、原爆投下の 21 年後に原爆ドームの永久保存を決め、51 年後に世界遺産登録を行った。とても長い時間がかかった。原発事故から 11 年経った今、もう一度、福島の教訓とは何かをしっかり考えないといけないし、そのための社会的仕組みづくりについても、我々リサーチセンターとして考えないといけない。

筑波：博物館は古いものを残す場所としてのイメージが一般的であるが、最近、現在進行中の資料も扱う取り組みも始まっている。以前地域課題の解決できる人材育成のために震災遺産の活用を試みたが、地域社会の理解が得られなかった。

震災遺産は実は博物館の何十万点の資料の一部でしかない。何を残すべきなのか、教訓とは何かなどたくさんの課題が重なっている。そして、復興とは何かについてあまり議論されてないとも感じる。震災遺産が博物館に収集されてしまうと、そこで時間が止まる。しかし、被災地での人の生活が続いてい

て、心境も変わっているが、収集された資料では震災以来の 10 年間の空白ができてしまう。それはいけない。震災遺産が復興も語れるようなものになると良い。

博物館の資料は未来づくりの資源になると良い。そのために、学校の教育が重要である。将来、防災教育の普及、さらに防災文化の形成を期待する。

森口：自然災害であれば、教訓の伝承が将来の減災につながるが、原発事故の場合、同じことが起きるわけではないため、教訓は自然災害と違うと考える。現時点では、簡単には変わらないのが教訓であろう。自分も何かの変化を期待していたが、簡単に変わらないと分かった。しかし、諦めてはいけない。なぜ変わらないか、どうすれば変わるか、この 11 年経った時点で考え続けなければならない。

友成先生の開会挨拶にあった壁と卵の話が心に刺さった。簡単には変わらない社会の壁と我々個人が作っている卵の殻がある。社会の壁が簡単に動かなければ、個人の殻を破るのが重要になる。例えば、地域住民と対話する前に、専門家同士で対話したほうがいい。きれいにまとめるのではなく、いろいろな観点を持つ人が議論する必要がある。その議論する姿勢も、行動で次の世代に教えるべきである。

国の省庁間や自治体間に厚い壁がある。国が加害者で、福島県が被害者であるという固定された構造が逆に議論の阻害となっている。この構造において、地域住民に福島の未来を考えてほしいが、住民はそれが国の責任だと思いがちになり、話がなかなか進まない。社会事化はやはり簡単ではない。今、福島に関する報道数も減っているし、福島の地方版には載っても、全国紙にはなかなか載らない。共感してここに集まったみなさんの中では議論が確実に深まりつつあるが、その議論をどのように広げるのか、あるいは広げる必要があるのか、次のステップとして考えなければならない。

崎田：私は 1F 廃炉の先研究会で、これまでにない専門家、地域住民、廃炉の実施主体という三者の対話の場の形成に取り組んできた。地域社会では、1F 廃炉が難しいことで敬遠する人は以前多かったが、今、1F 廃炉をもっと知りたいという人が増えてきた。廃炉以外の楽しい地域社会の話題も話せる場や、廃炉と地域の将来を話す場などを作ることは、3 年の対話を進行する中で、今ならできると感じている。地域住民が廃炉の専門家と一緒に話し合ったりすることによって、専門家も住民の意見を 1F 廃炉事業に生かしてくれるだろうと思う。今できる第一歩をみんなで地域に広げると良い。

菅波：人々の主体性が育まれるのが対話の大きな効果である。自分の考えを聞いて、肯定的か否定的かを別として受け止めてくれる場所が大事である。そこから帰ってきて、自分も改めて考え直す。そういう相互作用が重要である。先ほどの壁と卵のことについて、一人ひとりの主体性が育まれることと、システムが変わることとはギャップがある。それについて、国の機関で働いているみなさんと対話できな

いといつまでも平行線のままである。卵同士の関わり合いがそのための動力になるかもしれない。

松川（大学院生）：私は福島復興ワークショップに参加することを通して、地域の人、地域の文化を知って、その地域に対する想いが変わったと実感した。学生として、自分の経験を発信するだけでなく、周りを巻き込んで、地域に実際に足を運びたいと思う人たちを増やしたら良い。例えば、大学で友達への声掛けなど、そのようなきっかけを作って、少しずつ広めたい。

渡邊（高校生）：震災の時は自分が小学校入る直前で、記憶がギリギリある世代だと言える。今まで座談会などに参加してきた体験から言えば、若者は年齢と近い人とは話し合いやすく、自分事として捉えやすいと感じる。これから記憶がない子供が増えてくるため、若い世代として、次世代に震災の記憶を伝えるべきである。

松岡：1F 廃炉の話はやはり難しい。難しいからこそ、高校生や大学生、地域社会の方にはぜひチャレンジをしていただきたい。できれば、2022 年度の 4 月以降、対話の場づくりと並行し、学びの場づくりもやりたい。事故炉の廃炉とは何か、何のための廃炉なのか、どういう中間的な状態、最終的な状態がありうるのかなど、我々は地域社会の方と一緒に 1F 廃炉を学ばなければならない。ふたば未来学園とも協力して、そういう生徒や地域住民が参加する学びの場を作りたい。

もう一つ、みなさん、特に若い方に忘れて欲しくないのは、福島は今でも全国に 2 万 6000 人ぐらいの避難者がいることである。福島の復興は福島のことだけでなく、47 都道府県の全国のことでもある。福島の避難者が今でも全国にいることは決して忘れてはいけない。帰るか、帰らないかはそれぞれの権利であり、その多様性を踏まえながら、福島復興を支援していきたい。

菅波：1F 廃炉を全部理解するのは住民にとって無理である。ただ、知らないからこそ見えるものがあると思う。そういう違う知識量を持つ人々が話できる場の設定を工夫するのが、国や専門家の役目である。しかし、今その工夫が足りず、置いてきぼりの人がいる。難しいとは知っているが、学生や若者でも気軽に参加でき、知らないと言っても受け止められ、自由に話できる空気感が作れると良い。

2021 年の 5 月に未来会議が、廃炉・処理水をテーマとした、専門知識のない一般市民が対象の対話イベントを開催した。廃炉の話をしたが、他に家族、自分の人生、未来についても多く話した。したがって、知識が対話への参加条件でなく、自分の感覚に向き合ってから、次に他人に起きたことに関心を湧いて、知ろうとしたり話したりする。それは、対話の素晴らしいところである。

永井：ふたば未来学園でそういう場を作ったらどうだろうか。

渡邊（高校生）：ふたば未来学園だからこそ、そういう対話の場をしやすいと思う。ただ、学校内でも復興や福島に対して、人によって意識が違う。そのため、いろいろな立場や考え方を持ち合って対話する場があればいい。

崎田：そろそろこういう対話の場を地域から提案してもらいたい。松岡先生からも、学びの場を来年作っていくとの意思表明があった。地域住民と国の方や廃炉事業者が率直に話しあい、一緒に地域の状況を考えれば、そこから信頼関係が生まれてくるのではないか。廃炉ガバナンスという意味で、廃炉完了までのことや将来のことなど、きちんと対応できる場も必要である。今最初の一歩を出すことが大事である。

永井：大学生はその場にどう関わればいいか。

松川（大学院生）：大学生も廃炉問題に対していろいろな立場や考えがある。その意見の多様性を理解しておきながら、より関心を持って場に参加することが大事である。

永井：我々の復興知事業は、地域の中高生・大学・社会人とつながる仕組みづくりと併せて進める必要がある。そのため、高校生や大学生主体のプログラムを積極的に実施している。しかし、若者を利用しているのではと懸念される可能性もある。それは、プログラムへの参加が皆さんの将来につながるという視点もありうる。ふたば未来学園副校長の南郷先生による「立場を超えて、突破力を持つ人材を育成したい」との意見について、みなさんのご意見を伺いたい。

菅波：私は南郷先生の意見に共感する。価値観が違い、年代対立が生まれるのは当然であるが、それを止める力を持つ人がたくさん育ち、また、そういう人々が対話を通して意思決定に関与することで主体性を獲得し、最終的に地域が育つことにたどり着くと良い。

森口：1F 廃炉というテーマは対話とすぐに結びつけにくい。廃炉が難しい問題であるため、難しい問題のアジェンダとして設定しないと突破できない。この前、1F 廃炉の先研究会で地域対話を開催したが、いきなり 1F 廃炉について地域対話をしようとしたが、やはり難しかった。対話の中で、廃炉より、他のことだったら会話してみたいという地域住民の感想があった。もちろん 1F 廃炉から逃げるわけでなく、ただ、少しずつ信頼関係を築きながら、回り道で廃炉のテーマにアプローチしていく。何か当事者として話ができる材料や話題から始めれば、廃炉の対話を広げていくだろう。

永井：1F 廃炉の話題と、人々が自発的に自分事にするテーマと合わせたら対話がよりスムーズに展開していくと感じた。そういう意味で、エコミュージアムも含め、それぞれいいところを取りできる枠組みの構築を期待する。国のほうはそれについてどう思うか。

福田：国としての役割や責任を考える上で、色々な方のご意見をお伺いするのが大事であると感じている。たくさんの方々とのつながりの中で、前に一歩進めるために何ができるかを一緒に考えることができるこういった場は本当にありがたく思う。

菅波：多様な人が安心して発言できる小さな場を作り続けることが私にできることである。より大きな枠組みの対話はやはりそれなりに専門性のある方の関与が必要となる。いろいろな対話の場は役割分担があり、それぞれ活躍したら良い。

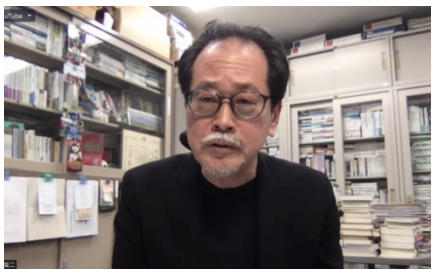
松川（大学院生）：本日の議論を通して、肩書き・立場・世代を超えた人々の対話が大切であると感じた。学生としてできることと言えば、周りの友達や家族を対話の場に繋げるきっかけを自分から動いて作ることである。

渡邊（高校生）：今日いろいろな世代の人と話ができて、楽しかった。いろいろな人の価値観を知ることが大切であると改めて思った。そして、人との関わりや学校の探求プログラムの中で、考えれば考えるほど分からなくなった。また、考えるのに疲れて逃げたいと思う時が多々あるが、考え続けることは忘れてはいけない。

永井：自分事化のリレーというのは自分からいろいろな人に広げていくということもあるし、今から大人まで自分事化を持ち続けていくことも重要である。その中で、教訓を自分なりにも引き出すことが非常に大事である。

【閉会挨拶】

松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）



第 9 回ふくしま学（楽）会の閉会にあたり、主催者を代表して閉会の挨拶をさせていただきます。

東日本大震災・福島原発事故から、まもなく 11 年を迎えます。早稲田大学は、2017 年 5 月に、長期的かつ広域的な観点から福島復興研究を実施するため、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターを設置しました。この 5 年間、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは 3 つのことを重視してきました。

まず、日本の大学の福島復興と福島原発事故に対する社会的責任として、長期的かつ広域的な観点から福島復興と原発事故に対する調査研究を実施するということです。

次は、現在の復興政策や廃炉政策の肯定でもなく、否定でもなく、客観的な根拠に基づきつつ批判的な立場から調査研究を行うということです。

最後に、地域社会と共に学び、共に考え、共に研究をすることで、「復興と廃炉の両立」という困難な課題の社会的解決に資する革新的な学術的研究成果を産み出すということです。

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、2018 年 1 月 28 日の第 1 回以来、半年に 1 回のペースで、世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興を共に考え、オープエンドな議論の場としてふくしま学（楽）会を開催しています。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、というふくしま学（楽）会のモットーを具体化するため、3 つの方針でプログラムのデザインを行なっています。

第 1 は、出来るだけ多くの新しい人に参加いただくという方針です。今回、初めてふくしま学（楽）会プログラムへ登場いただいた方は 15 名でした。私たちの議論の輪が少しずつ広がっていて、大変嬉しく思います。

第 2 は、「地域を超えて」という方針で、特に福島復興への関心の低い西日本の人々を交えて議論するという方針です。今回は、第 2 セッションで、神戸の人と防災未来センターの高原さんに参加いただきました。今後は、もう少し、西日本の人々の参加を考えていきます。

第 3 は、「分野を超えて」という方針です。今回、初めて、原子力規制委員会・原子力規制庁の木原さんに参加いただきました。また、福島県立博物館の筑波さんにも参加いただきました。福島復興に関わる重要な分野の多くの関係者に参加いただけるようになってきました。

さて、今回の第 9 回ふくしま学（楽）会のメインテーマは「対話の場」づくりでした。本日の議論にもありましたように、「対話の場」づくりは、「人づくり」であり、「地域づくり」であり、「最大の風評対策」です。

原子力災害からの創造的復興の最大の課題である「復興と廃炉の両立」を、日本社会が成し遂げ、世界へ新しい福島の地域社会の姿を示すためには、フォーマルであれ、インフォーマルであれ、地域社会との多様な「対話の場」を形成することが、どんな困難が伴おうとも、必要不可欠であると考えています。早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、こうした未知の領域に突き進む挑戦を、こ

れからも続けていきたいと考えています。
　本日は、広野会場も含め最大時 120 名を越える多くの皆さんに参加いただき、長時間の熱心な議論へご参加いただき、誠にありがとうございました。次回の第 10 回ふくしま学（楽）会は、8 月上旬開催を予定しています。次回は、是非、福島県浜通りの富岡町か大熊町で、オンラインも含めて、開催したいと考えています。
　引き続きよろしくお願いいたします。

＜チャット＞（抜粋）

・肯定派・否定派は背中合わせ。ちょっと立場やタイミングが変わればどちらにもなり得る。どちらの視点も自身の中に持ち合わせ、双方の視点から物事を考え、そして選択することが重要だと思っています。

・廃炉と福島の森林をセットで再生する方法はどうか。例えば、森林にプールを多く作り、海水を貯蔵して、廃炉で揚水発電のセット等。廃炉後に原子力安全祈願神社のようなものは可能か。廃炉後に原子力安全文化コンテストや安全文化醸成フェスティバルのようなものは可能か。

・1F 建設には双葉郡の多くの方々が労働者として関わりました。廃炉も同様に地域住民を労働者としてあるいはそれ以外の立場での積極的に採用し、まだまだ生業の場が少ない地域における生計の役立てていただく、というカタチでも地域住民と廃炉現場の距離を縮め、壁を低くする、ひとつの方法だとも考えたりしています。

・風評被害防止のためには 60 歳以上はフォールアウトのセシウム、60 歳以下はカリウム K-40 が体内にあることをホールボディカウンター（WBC）で測定して公開、特に国会議員や地方議会議員等を対象に測定して公開するのがいいように思う。自分の体に放射能がある、ということを認識することが風評防止につながるのではないか。

・これまで、数多くの「対話の場」や「コミュニケーションの場」をエネ庁さんが設定してくださってきたこと、理解しているつもりです。他方で、今回の資料をみてもそうですが、「お伝えする」「お届けする」という表現が多く、皆さんが住民や国民から、何かを「受けとる」ということを、あまり想定していらっしゃらないかなと感じてもいます。多くの意見をいただきたい、とのお話もありましたが、住民や国民の意見がどう扱われてきたのか、今後どう扱われていくのか、今日の学会のテーマ、問題意識の一つであるとも思いますが、そこを住民も含めて更に深掘りできる機会もあったらいいな、と感じました。

・意見がどのように反映されたのかという点は、意見を伝える時間・労力をつかった側からすると、非常に知りたい情報かもしれません。それが伝わっているのか、伝わっているとして不十分と受けとめられてはいないか、その検証などはされていますでしょうか。意見を伝える側が、意見を伝える目的と、エネ庁さんがコミュニケーションを取ろうとされている目的と、そもそもその点に乖離があるとすれば、そこが大きな課題かもしれないな、と感じました。双方の「目的」について、更に対話ができたらいいのかもしれないなと感じました。

・いま 1F 廃炉現場の見学は事前の手続きなども必要で、なかなか見学したくてもできない人もいるの

だと思っています。1F を遺構として欲しいという意見もある中、一点提案です。閉鎖的な見学経路を構築することなどで、事前の手続きなく当日受付での見学などは可能にならないでしょうか？

・1F を原子力災害遺構とすること自体には大賛成の立場ですが、廃炉後の遺構化ではこの先何十年先かもわからない、という課題もあって、いわゆる震災遺構として確認に保存される施設とは違ったカタチが必要だと思っています。僕の提案としては「活きた原子力災害遺構」として廃炉事業の過程も含めて公開し、原子力発電のあり方やエネルギー政策、地域の将来像などを議論する題材の一つとすべきだと考えています。

・地域住民とのコミュニケーションについては、これまでも様々な場で発言してきましたが、地域の集会所レベルでの対話を何度も繰り返していくしかないと思っています。コミュニケーションは目的がありすぎても無さすぎてもうまくいかないのが、むずかしいところですね。いかに双方向のやりとりをさせていただけるかが大事だと感じます。

・科学的根拠みたいなものを前面に出してしまうと専門知識を持たない一般的な地域住民、国民は対話の入口で躓いてしまうので、対話の場ではキャッチボールし合うことを重要視していただければと思います。

・東日本大震災の震災遺構・伝承施設として僕のオススメは岩手県陸前高田市の伝承館と宮城県山元町の中浜小学校です。陸前高田市の伝承館は古来からのあの地域の津波に関わる言い伝えや震災前にあった知見から、実際にあの震災がどういうメカニズムで発生しなぜあれほどの被害を出したのか、実際にどの場所でどのような状況被害が起きたのかなどを未来の防災につながるカタチでの伝承スタイルになっていて、音じれてみて非常に学びが多い施設です。山元町の中浜小学校は過去の津波を教訓にして建設された小学校が被災し孤立したという実体験を震災直前からのストーリーを含め見聞きできるうえ、津波の影響が幹事と入りやすい痕跡の残る施設で、日常の中の些細な防災意識がどう作用するかなど誰でも活かせる教訓が学べる施設です。震災・原子力災害の被害やインパクトを中心にするのではなく未来の防災に繋がる学びが大変重要で、それが少ない伝承施設・遺構は必要ないとも思っています。

・震災遺構の議論には、あの災害から心理的に立ち直れていない人もいて、そういう人にとっては震災遺構の存在そのものによって心を痛める人もいるということ。宮城県南三陸町の防災対策庁舎の問題はまさにそれが議論の対象となっていて、まだ宮城県預かりとして保存するか否かの議論が現在進行形となっています。そして、地震・津波によってそもそもダメージを受けているため、安全に保存するにはかなりの維持費が発生してしまうため、費用対効果というものも検討材料となること。また、時代とともに伝承施設は古臭いものになってしまう。震災から長い年月が経過し、社会の中で震災の記憶が社薄れ、伝承施設が古臭い施設になると、いずれ訪れる人は大幅に減少する。気仙沼市唐桑にあるかつての津波を伝承している施設はその状態に陥っている。

・福島県博物館で展示されている震災展示に毎年行っています。双葉町伝承館や富岡町ミュージアムとは違った趣があります。今年も展示予定があれば行きます。

・僕は東日本大震災津波被災地域全域の被害と復興に触れ続けてきましたので、今となっては震災後復興期の語り部をさせていただいたこともありますが、あの日あのときその場所にはいなかったので、あのときの地震・津波のリアルは知り得ない立場。ですが、何度も現地を訪れ被災地域の方々と触れ合う

中であの日あのときの話をいろんな方々から聞かされ、その蓄積がバーチャルではありますが、僕の中で大きな経験と学びになりました。

・何か祭りの要素で伝承があればいい。秋田のなまはげとか、徳島の阿波踊りのような。一度は「人が住めなくなった場所」「自由に立ち入れなくなった場所」から「いつでも遊びに行ける場所」になったということはとても素敵だし、実はとてつもなく大きな進歩ですね。

・僕個人的には、ふくしまを「被災地」というカテゴリの中に入れて見ている間は、ふくしまの地域課題などを自分事化できないと思っています。「知り合い事化」という言葉もありましたが、ふくしまに愛着が湧き、何度も行きたい場所、住みたい場所、守りたい場所になれば自ずと自分事化されるのではないでしょうか。

・廃炉に 40 年かかるとすると今の大学生、高校生だけでなく、彼らの子どもの世代、孫の世代にも自分事化しないといけない。世代間倫理、世代間自分事化が必要ではないか。

・地域起こしの活動で言われている言葉です。地域おこしには「バカモノ、ワカモノ、ヨソモノ」が必要とのことです。役立つかも知れません。

・学生・若者の皆さんが主体性をもって何かに取り組もうとすることは重要かも知れませんが、多くの世代や立場・環境の方々にも関わる「地域課題」については出来るだけ多世代が混ぜに関わり合うのが大切だと思いますね。

・「1F 廃炉の先」の未来像も含めて、今あるいはこれから我々が取り組むべきは、ふくしま浜通りの魅力を取り戻し、魅力を発見し、そして新たな魅力を生み出すこともあると思っています。松岡先生もおっしゃっていた「廃炉して更地にしてそれからどうするのか？」というようなこともしっかり整理していかなければならないのでしょう。

・「なぜ、『廃炉』が必要？」ということは、共に対話できないでしょうか？

・福島第一・第二原子力発電所について考えるとき、そもそもの「なぜあの場所に原子力発電所がつくられたのか？」という事実関係もしっかり認識していないと「1F 廃炉の先」の未来像をリアルに思い描くことは難しいのかもしれないと思っていますし、立地自治体の帰還を含む住民増加状況を見る限りは当該地域にどうフィードバックされるのかも疑問が残るのかな・・・と。

・結果につながらないことも多いけど、深く考えるというプロセスを経験することは人生の中でとても有意義な時間です。

・素晴らしい知と心と行動の交差点のような場だと感じました。このような場を創って下さった皆さま、ありがとうございました。ご登壇された皆さま、本当にありがとうございました。次回も楽しみにしています。

以上